
俺と小さな魔法使い

神盾零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と小さな魔法使い

【Nコード】

N7101R

【作者名】

神楯零

【あらすじ】

平凡な『俺』と、夢見がちな女の子で幼馴染みの雛鳥ひなどり美羽。みはねそんな二人の普通だけど、優しい毎日。のほほんと和んで楽しみみください。

小さな魔法（前書き）

【Smile Japan】の企画作品です。

小さな魔法

「小さな魔法」

「ねえねえ。キミ魔法が使えたらとか思わない？」

帰り道。幼馴染みの雛鳥美羽ひなどりみはねは唐突にそんな電波な事を言った。高校生にもなつてそんな事を本気で言う女の子は病院に連れていくべきなんだろうが、俺は気にしない。だから俺はいつもどおりに返す。

「思わない」

「そう！ そうだね！！ キミもそう思うよね！ 魔法が使えたら最高だと…… って思わないの！？」

「ノリツツコミは古いと思うぞ」

「それだと話が繋がらないでしょ！？」

「いいじゃん別に…… ぶっちゃけ面倒臭いし」

「ぶっちゃけないで！ そこは乗っかってよお！」

手足をぶんぶん振り回しながら叫ぶ美羽。やはりナイスリアクション。近所迷惑だからいじるのはこれくらいにしとくか。

「あゝはいはい。使えたらいいねゝ俺もそう思うよー」

「その棒読みのお手本みたいな棒読みは気になるけど…… キミもそう思うよね！」

「そこからやり直すのか……」

「それでねそれでね！ アタシは魔法が使えたら」

「世界を滅ぼしたいと？」

「そうそうどこーん！ って違うよっ！」

「じゃあ世界征服」

「そうそう世界はアタシのモノだあー！！ って違うよっ！？」

「夢の無い奴だ」

「どっちがだよぉ!!」

手足をぶんぶん回しながら叫ぶ美羽。相変わらずナイスリアクションだが回りを見る目が痛い。

「お前は魔法が使えたらどうするんだ？」

「む……無理矢理戻すんだ。まいいか！ 私が魔法が使えたら空を飛べたらいいなあって！」

「鶏のようにか？」

「そう。羽を一生懸命羽ばたかせて……って跳べないよ!？」

「いやいや……結構飛ぶぜ鶏。数メートルくらいは」

「飛んだ内に入らないよぉ!？」

「じゃあ人鳥^{ペンギン}」

「それも飛べないよぉ」

再び手足をバタバタさせる美羽。いやその姿は人鳥みたいで可愛いんだけどな。

「ぐす……真剣に聞いてよぉ」

「俺はいつでも真剣だ」

「絶対ウソだぁ!!」

マズイこれ以上やったら泣かせてしまうな……

「わかった。わかったから泣くな」

「な、泣いてないモン！」

「涙声で何言ってるんだよ」

「うう……。いいモン知らないモン！」

拗ねてしまった。本当に高校生かよ。ふむ。こうなったら面倒なんだよな。なら、引いて駄目なら押して駄目ならスライドさせて見るか。

「そうか。俺が悪かったな」

「……………え？」

食いつきいいな。入れ喰いだな。

「潔く諦めよう！知らないなら仕方ないしな！」

「あ…………諦めないでえ!!!!」

「んで。空飛んでどうしようって言うんだ」

「……………やっぱり無理矢理戻すんだ。天使みたいな白い羽で跳べたら素敵でしょ？」

「……………」

「何一つ無い不自由な空！ 綺麗な空を飛べたら……………とても気持ちいいと思うな」

「……………」

「それでね色んなトコロを空から見るの！ 凄い綺麗だよ。きっと！」

俺は領空侵犯とか、鳥人間出現でマスコミが騒ぎになるなどが、空は排気ガスが漂ってるだろうとか……………そういう夢の無い言葉を引っ込めた。

俺だつて空気は読める。たまにはコイツの絵空事を聞くのも楽しい。美羽は本気でそう思っているんだろう。馬鹿で幸せな奴だけ……………そう言う奴が隣で笑っているとこっちまで笑顔になっちゃう。そう言う不思議な奴だ。

「ったく……………もう魔法が使える癖に贅沢言いやがって」

「え？ え……………えええ！！？ アタシ魔法使えるのお！！！」

「ああ。お前にしか使えない飛び切りの奴がな」
小さな魔法だけだな。それは大切なモノだ。

他人を笑顔に出来る小さな魔法。

「なにになに！？ なにソレ！？」

自覚が無い所がまたな……………

「自分で気付け馬鹿」

「ば、馬鹿つて何よう！？」

「馬鹿凄い馬鹿」

「酷くなってるよお！？」

ふと……………思った。

「俺が魔法が使えたら……」

「え……何？」

「お前とずっと居られる魔法が欲しいな」

「え……えええー！！？」

顔を真っ赤にして手足をバタバタさせる美羽。

「ええー！！？」

「いつまで驚いてんだよ。ちなみに今のは遠回しな告白だ」

「え！ ええええー！！??」

「急に言われても困るか。なら時間をやるよ。一分だ」

「全然譲歩してないよお！！??」

「ちなみに本気だ」

「な、なあんだ……本気かぁ……って本気なの!？」

「ああ」

「う……え……えう~~~~~よろこんでえー!!？」

「宜しうな美羽」

賑やかな帰り道を俺達は歩く。隣には幼馴染み……いや恋人が居る。そんな日常がいつまでも続きますように。と……らしくも無く夕暮れの空に願った。

「信じる魔法」

「信じる魔法」

何事にも飽きが来る。永遠と繰り返していれば飽きが来る……と言うが……

「もう！！ キミは意地悪過ぎだよ」

美羽コイツイジりは決して飽きない。多分永遠に繰り返しても。

「そんなに怒るなよ。飴ちゃんあげるから」

「アタシはそんなに子供じゃないよぉ！！」

「イチゴみるくキャンディーだ」

「わぁい！！」

子供だった。しかも幼稚園ぐらいの。

見かけ（146？。小学生並）も精神的にも子供だ。

並んで歩けば妹と思われる。

「おいしー」

幸せそうな顔して飴を舐める美羽。……可愛いなオイ。

「……これと一緒に舐めるとなお美味い」

そう思うと悪戯したくなるのは性さがだよな

「ホントに！」

俺が渡した赤い色の飴を何の疑いも持たずに口に放り込む美羽。

「~~~~！！？」

顔を真っ赤にして手足をぶんぶんさせる。

「なにコレ~~~~！！？」

「チョコキムチ味」

「奇跡的な味だよぉ」

「じゃぁいいじゃん」

「悪い意味だよ」

「どうしてそんな意地悪するんだよぉ」

「つい」

「ついじゃないよぉ」

相も変わらずナイスリアクション。しかし……自分でやって置きながら言うのもなんだが……騙されやすいよなあ。

将来詐欺とかに引つ掛かるかも……

「」

「なんで？」

美羽は不思議そうに首を傾げる。

「なんでってそりゃ……」

「疑うより信じる方が簡単だもん」

気軽にそんな有り得ない事を言う美羽。その顔を見ればそれが本気だと分かる。

「……………」

信じる前に疑ってしまうのが人間だ。疑う前に信じる。信じる事を疑わない。そんな事が許されるのは子供の時だけだ。

「俺は」

「ん？ なあに？」

「いや……」

無垢なお前の笑顔はこれからも俺が守る。汚れ役は望む所だ。美羽は純粋なままで居て欲しい。願わくば……俺もそうでありたかった。

「……………うん。正確にはちょっと違うかも」

「……………は？」

「そうだ！ キミだからかな。キミの言う事はほとんどホントの事だもん」

「……………」

「やっぱりキミの事が好きだからかな？」

「……………」

恥ずかしい事を笑顔で言う美羽。こっちが赤面させられるとは…

……流石に虚をつかれた。

「疑う事も嘘も生きていく為に必要だもん。子供じゃないからソレくらい解るよ」

「……………」

「それでも……………それでもね」

そう言って微笑んで。俺にとって。魔法の言葉を美羽は紡いだ。
「好きな人は信じてるよ！」

また逢える魔法

「また逢える魔法」

「さようなら」

そう言うのは簡単だ。

「またね」

でもその後になんて言うのは難しい。

「君は可哀相だ」

そう彼女は俺に言う。

「君の魔法は報われ無い」

心から憐れむように彼女は言う。

「何一つ。誰一人救えない。そんな魔法だ」

「だとしても」

俺は言い返す。これだけは言い返さなければならぬ。

「それでも何もやらなかった方がよかったなんて俺は思いたく無い」

「……………」
帰り道。今日は俺の隣に美羽は居ない。部活があるそうだ。代わりに。

「……………」
女の子が居た。背丈は俺の腰辺りで小学低学年ぐらいの女の子だ。念の為、俺の名誉の為言っておくが誘拐した訳では無い。
発端は単純明快だ。

「……………」
女の子が電柱につくまっている。周りは気付いた様子もなく、通り過ぎていく。

「……………」
普通誰かが声をかけるだろう。しかし周りは女の子を居ない者のように扱う。

「……………」
俺もまた、女の子の前を通り過ぎる。

「……………」
予定が追加された。
コンビニに入る。棒付きの飴玉を二つ購入する。
しめて120円。

「……………」
再び俺は女の子の所に戻る。
「食べるか？」

「……………」
「二つあるから心配するな。要らないなら二つ共俺が食べる」

「……………」
「苺ミルクキャンディーとコーラだ」

「……………」
「苺ミルクか。じゃあ俺コーラ」

「 苺ミルクキャンディーを女の子に手渡す。」

「……………」

「別に礼なんて要らない」

「……………」

「ガキに見返りを求めるか」

「……………」

「やっぱ迷子か……………」

「……………」

「俺は居ないから。分らないけどな。でも淋しいのは嫌だよな」

「……………」

「俺はいつでもここに居る訳にはいかない。だからいずれ俺も居なくなる」

「……………」

「だから捜してやるよ………… お前の母親」

「……………」

女の子は嬉しそうにそう言い立ち上がった。

「……………」

「別に………… 気が向いたただけだ」

「……………」

「………… 確かにな。やっぱアイツに影響されてんのかな」

「……………」

「俺の幼馴染みで恋人だ」

「……………」

「茶化すな」

俺達は歩く。人気の無い場所へと歩いていく。

「……………」

「ここで別れたのか？」

「……………」

「そうか」

しばらく歩き回る。

「……………」

「……無くしたぬいぐるみ？ ……探せってか？」

「……………」

「分かった。分かったから睨むなよ」

とは言っても熊のぬいぐるみ何て……何処に？

「……………」

木の陰に何があつた。太い枝が地面に刺さっていた。

「……………」

枝と手を使い、地面を掘る。すると、

「……………！！！」

泥や土で真つ黒になつたぬいぐるみがあつた。時間が立っているのか原型が何なのか分からない。

「成る程……これか」

「……………」

「別に、感謝される覚えは無いけどな」

「……………」

「母親からのプレゼントか……それは大事にしないとな」

「……………」

「迎えに来た……？ 俺には見えないな」

「……………！！！」

「だから礼なんて要らない。早く行けよ。待ってるんだろ？」

「……………」

「……。俺は行けない待ってる奴が居るからな」

「……………」

「……………またな」

「……………！！！」

うん。バイバイ！ おにいちゃん！

「……………」

女の子はもう居なくなっていた。家に帰ったのだろう。

「……………」またな」

もう二度と逢えないと分かっている俺は、そう言った。

寄り道も終わり帰宅していると、

「あつ。キミ何してるの？」

「……………」美羽か」

美羽と一緒に帰る事になった。

「迷子を送っていった」

「わぁ！ 優しいねキミは……………」

「別に……………」

分かれ道。俺は右に。美羽は左に。

「じゃあ……………」またね！」

俺はさよならは言わない。さよならは悲しい魔法だから。もう一度逢えるように。願いを込めて。

「ああ……………」またな」

「俺と小さな魔法使い」

「俺と小さな魔法使い」

「後悔はしてないのかい？」

後悔ならいつでもしている。

「違う違う。生きてきた事にだよ」

そういえば。こんな事を言いやがる母親だった。意味が分からない事をどんどん言いやがって。

「話を逸らすなよ。誰よりも死に近いキミだ。どうなんだね」
逸らしてるつもりはねえ。

さあな。生きてる事自体……俺には分からない。でもな。

「でも？」

人は誰でも魔法が使えるんだよ。小さな取るに足らない魔法だ。でもそれでも人は救える。

ならそれって生きてるってコトだ。そう言う奴を……俺は知ってるから。

「……言うようになったなガキが」

満足そうに笑う。今気付いたがコレは夢か？

「違うし、合っている。ただ境界が曖昧なだけだ」

意味が解らん。

「でもキミはもうココに来る必要は無い。母離れて奴だ」

………やっぱ母さん（アンタ）だったのか……

「じゃあな。魔法使い。美羽ちゃんに宜しく」

ああ………

「……………キミ……………」

五月蠅いな……………眠いだよ……………

「キミ……！」

「うお……!？」

びっくりして目が覚める。目の前には美羽が。

あれ……………なんで？

「大丈夫？ 今日ずっと寝てたよキミ」

「はぁ……………つーか何で俺の家に？」

「窓が開いてたよー」

「さて……………110は」

「誘拐されたーって言うよ？ 泣くよー？」

「脅迫もいとこだなオイ」

「キミの真似ー」

「……………」

なんつーか……………妙な夢見てた気がするが……………コイツのせいでどうでもよくなってきたな。

「はぁ……………」

「むう？ 何だよーそのどうしようもないなーコイツって目は？」

「実際……………どうしようもないだろ」

「ふふ」

「ははっ」

俺の幼なじみは魔法が使える。他人を笑顔にする魔法。

それは『笑顔』。

俺と小さな魔法使い。これからもきつと。

「俺と小さな魔法使い」(後書き)

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7101r/>

俺と小さな魔法使い

2011年5月8日16時26分発行